



日本大学通信教育部校友会

兵庫県支部 (平成29年7月号)

支部長挨拶

うつとしい梅雨の最中ですが、稲の生育には欠かせない雨です。10月29日(日)16時から姫路キャッスルホテルで近畿ブロック総会を開催します。ぜひ参加ください。何かチョット良かった？という会にしたいと思っています。

さて第46回定期総会は5月20日(土)日本大学桜門会館で開催され新会長は、鈴木勝氏が改選されました。やる気満々の感じですが、兵庫の支部長は前田忠義、副支部長は岸本卓也・植田克郎、会計は塩見俊郎です。役員だけでは、この不安な社会に力と光など無理です。校友会の皆さんのちよつとした呼吸と支援等お互いにメイクし合ひましょう。皆さんとの縁を祈念しております。最後に重ねて、近畿ブロック総会の参加を心から願ひします。

兵庫県校友会支部長 前田 忠義

自由投稿

「人生の転機 天がくれたもの」 正本 君子

グラグラツときたのは大震災であった。店舗、居宅(2階)は築60年の木造であった。120年続いた小売店はわずか18秒で倒壊し

た。義父は厳寒の朝5時45分には既に店を開けていたが品物満載の陳列の間に倒れこみ無事救出された。幸い大家族の9人は保育園児の孫たちを含め全員無事であった。3年後義父は永眠し、インショップの店舗もクローズ。

価値観が一変した。「そうだ！これからは原点に戻って形無きものに！」時間の制約から解放され、何の迷いも無く飛び込んだのは通信教育だった。43年のブランクを埋めるには予想外の努力を要した。暗中模索で過ごした4年間は、戸惑いながらも再び青春を味わうに足る充実した日々であった。

特に印象深いのは二人の先生との邂逅であった。その一人は、やや高齢の女性の日本史の先生で主に女性史に造詣が深く学術書も上梓され東京近郊で5箇所も講座を開講しておられた。毎回大勢の受講者のため重い資料を提げ電車を乗り継ぎながら会場にこられ、50分2回の講座は立ったまま。奈良時代から現代史まで教科書では習っていなかった細やかな史実を解説して頂いた。新参の私

も不勉強ながら歴史探訪だけは参加させて頂いた。行程もレジメも先生自分で作成されたものであった。奈良、京都の寺院仏閣はもとより滋賀(琵琶湖周辺)、大阪(堺)、兵庫(赤穂周辺、淡路島)、広島(宮島)、長崎(五島列島)、新潟、サントペルグまで授講者たちとの心に残る旅は枚挙に暇が無い。参拝と同時に博物館以外で秘伝や宝物を見学したのは、初



めてであった。その貴重な時間に、一筋の道を貫かれた先生ご自身の生き方に何よりも敬服した。

ある時、長崎の駅前の歩道橋を先生と渡っていたとき、急に「行くんでしょ？」と言はれたのできつと次回の見学旅行だと思ひ、何げなく「ハア」と言ってしまった。それが「院」のことであった。自分ながら思いがけない展開に驚きつつも前に進むしかなかった。

近代文学を更に深く追求したいと思ひ「文化情報」を専攻した。選んでしまった。再び参考文献との格闘が待っている。悩みながら帰宅し、早速メールを開いて見ると担当の先生からで、それが二人目の恩師であった。先生は近代文学の研究者で特に井伏鱒二の研究をされており、課題もその作家と作品についてであった。続いて大きめの茶封筒が届き、新聞記事のコピーとともに先生の走り書きがしたためられていた。『黒い雨』に対する猪瀬茂樹氏の指摘であった。早速、『重松日記』や他の原爆作品を読み、研究者の作品に対する真摯な向き合い方を学ばせてもらった。先生の頭脳にはあらゆる近代文学が網羅されていて、数々の著書も出され、どんな質問にも答えてくれた。ようやく修士課程が終わりほっとしていると「これが始まりですよ」と言われ、先生からは文学サークルや小さな学会にも紹介していただいた。東京周辺や旅先で、図書館や文学館へ足を運び、作家の暮らした時代背景や交流に接した。地元、兵庫の県立図書館や姫路文学館へも。多くの文人がいたことを改めて確認し、以前はスロープにゆかりの作家の写真が掲げられ宮本百合子や円地文子も出ていて、作品を思い返した。椎名麟三の舞台模型や司馬遼太郎のコーナーもゆっくり見せてもらった。

最近、立派に改築された文学館で、ある詩人が「しーんとした自分にと返ればいいんです」と書かれていた。久しく忘れていたことに気づかされた。

たそがれの帰路を静かなお堀端をとぼとぼと歩きながら、遠い昔、フランス人と裸足で天守閣まで駆け上ったことを懐かしく思い出した。角を曲がると、それまで見え隠れしていたお城が真正面に見えてきた。白鷺のような雄姿が紺碧の空に映える時、また訪れたい。

自由投稿

いなみ野学園便り(卒業)

塩見 俊郎

「仰げば尊し歌い別れ行く 友の背中を見送る紅梅」

似たような歌を二年前に歌会へ提出したことがあった。それからまた二年後に二回目の卒業を迎えた。二回目の大学院で新しいことにチャレンジしようと思ひ自治会長を引き受けた。大半が私より年配の学生で気を使うこともあったが、いい経験をさせてもらった。そして最後に大役の三月八日の卒業式。私と同期の大学院生五十六名と大学の各科専攻の二百八十四名の卒業生。大学は歴史文化、健康福祉、陶芸、そして園芸科がある。学園内は花と緑なのは園芸科の学生が、四季折々の花を世話をされているおかげと感謝の毎日。

卒業式は講堂で行われ井戸兵庫県知事を始め多くの来賓を迎えての挙行となる。式次第は、他の学校とほぼ同じ内容で君が代の斉唱の後に井戸知事からの卒業証の授与、皆勤賞の表彰、学生か



らの記念品の贈呈(テント等)、在校生からの送辞、謝辞と続く。そして仰げば尊し、蛍の光、学園歌の斉唱で式典は終わる。私は、大学院の学生代表として、井戸知事から卒業証を授与される光栄に恵まれた。リハーサルの時には自席から壇上までの歩き方、来賓への礼、卒業証の受け取り方などの練習をする。その甲斐あり大きなミスもなく大役を済ませてほっとしている。

式典後はクラスの五十六名と卒業祝賀パーティーも開かれる。入学当初は六十四名だったが、健康の理由などで途中で退学する学生もあつた。十二月には八十歳の学生が亡くなった。若い時の学生時代のように、勉強にアクセスすることは多くないが、無事卒業できた喜びはひとしおであつた。大学院の学生は、終了レポートが課せられていて、その内容を七分間で発表することになっている。発表はパソコンを使って説明するので、二人で助け合いながら発表する。

私のテーマは「平家物語と仏教」にする。平安時代後期の仏教は法然上人の浄土宗が広まりつつあつた。「平家物語」の作者は、仏教(當時は浄土教)を多く語っている。その最後の「灌頂の巻」では壇の浦で助けられた、建礼門院が大原の寂光院に平家一門の菩提を弔っている所へ、後白河法皇が行幸される。建礼門院は、清盛の娘として生まれ、高倉天皇に嫁し、安徳帝の誕生という、幸福(天上)から、安徳帝の入水の悲しみ(地獄)の六道を後白河法皇に物語る。

先日、法然上人の浄土教の先駆けとして当時の仏教界に浄土教の基礎を開いた源信上人の没後一千年忌が天台座主を迎えて、西本願寺と知恩院で行われ、妻とその法要に出席してきた。天台座主が、浄土宗

のお寺に出向くことは、かつてなかったことである。法然上人、親鸞聖人は、旧仏教系の宗派の弾劾を受けて後鳥羽上皇から四国、越後へ配流された経緯がある。それ以降は互いの信仰の道を歩いてきた。それが奇しくも、源信上人の千年忌で交流するのは、喜ばしいことだ。八月に奈良博物館で源信上人特別展が予定されているので、ぜひ行きたいと思っている。その前に、疲れをとるために妻と一緒に有馬温泉へ行く予定であるが。

(編集後記) 今年の春で学習指導員は終わりました。兵庫の学事相談会は私の退職と同時に無くなりました。詳細は不明のままです。科目試験会場は残っています。

兵庫県いなみ野学園の二度目の大学院を卒業して、研究生に残りました。先日学生に一時間の公開講座をしました。秋以降には兵庫大学のエクステンションカレッジでも講義をします。県内の生涯教育施設や公民館でも要請があれば出前講座をするそうです。これはまだ未定です。もう少しで大台に到達ですが、認知症予防には役立っているかな、と思っっています。兵庫県校友会の第七号をお届けします。

(塩見 俊郎)